茨城大学教育実践研究13（1994），183－198

社会意識と家族意識

中　原　弘　之*・池　田　伸　子**・佐　藤　真喜子**
針　替　直　哉**・田　添　洋　子**・三田村　万紀子***

（1994年4月28日受理）

Social Consciousness and Family Consciousness

Hiroyuki NAKAHARA, Nobuko IKEDA, Makiko SATO, Naoya HARIGAE,
Yohko TAZOE and Makiko MITAMURA

キーワード：発達，価値観，社会意識，家族意識，現代社会

現代社会における特色の一つとして，価値観の多様化をあげることができる。例えば自然科学の進歩に伴う技術革新によって，生活の合理化，平均寿命の延長化等が進められつつあるが，一方で，地球規模で発生しはじめた環境破壊問題や，人口比からも予想されうる超高齢化社会問題等，これからの人間社会の在り方についての意見は多岐である。このように，現代社会における発達観は多様化しているので，この発達観と家族意識との関係性を探り，今後の家族関係分析の手がかりを得たいと思っている。そこで，発達に関する社会意識を捉える質問と家族意識を捉える質問とを尺度化へ向けて開発し，大学生を対象に予備的調査を試みた。今回は，その報告であるが，社会意識における発達についての価値観と家族意識との間に，予想以上の有意な関係性が見いだされ，回答者に一貫した考え方が存在することをほぼ確認できたように思う。したがって，家族関係についての新たな分析のルートが開拓できそうである。

はじめに

発達心理学は，個人の精神発達に関する法則性を求めようとする個体発生的研究 ontogenetic study と，多くの種にわたる動物との比較によって，人間の精神発達に関する法則性を求めようとする系統発生的研究 phylogenetic study に分けられる。したがって，発達心理学において扱われる「発達」の概念は，生物学や進化論の領域において扱われてきた「発達」についての考え方に負うところが大である。

* 茨城大学教育学部　** 茨城大学大学院教育学研究科　*** 茨城大学教育学部科目等履修生

それまでの特別創造説 creationism に反論して，19世紀中葉に人間と動物との間の壁を取り去った Darwin,C.の進化論が登場する。その進化論に基づき，Bacon,F. 以来のイギリス経験論の総括を行った Spencer,H. の社会的進化論の登場により，発達の概念は益々価値概念化していった。

しかし，進化論が人間存在を合理的に説明したことによって，宗教観は打撃を受けたはずであるが，合理主義，実証主義に徹する自然科学が進歩した現在においても，人間は宗教に依存している。それは，宗教が扱ってきた全てを自然科学がまだ十分に説明しきれない為なのか，あるいは，自然科学の進歩によってかえって人間の有限性と神の無限性が明確にされた為なのか。いずれにしても，発達観における価値の多様化は起きるべくして起きたと言えよう。

心理学の分野において発達とは，一般に人間を中心とした生命の主として上昇的変化の系列をさすことが多く，Hurlock,E.B（1964）は，発達を完態という目標に向かって進む秩序と一貫性のある一連の前進的な系列と捉え，守屋（1962）は，更に壮年期以降の下降的な変化系列も加えることがある，としている。これは現在の生涯発達心理学の見方にもつながるものであり，本来は価値概念とは離れた存在であった。

現在の発達心理学は，個人に即した発達の視点に向けられることに偏る傾向があり，発達とは，「その集団の中でのみ可能であり，その集団参加者全員の発達の中でのみ各個人の発達もある。そしてそういった見方こそが人生への豊かさとしての発達，男女のあり方，家庭のあり方としての発達の関係を見い出す手だてとなる」と麦島（1985）は21世紀の発達心理学を展望して述べている[1)]。「個人の発達」と「集団の発達」の２つの視点は，いずれも重視されるべきであるが，後者に重点を置いて前者を捉えるべきであるとする指摘には同意するところである。集団や社会が志向する変化“発達”に個人はもちろん，子どもはとりわけ大きな影響を受けるからである。

時代と共に様々な価値を帯び，変化する「発達」観を捉えることは，我々が現代社会のみならず未来社会における適応した生活のあり方を求める上でも重要なことである。

本研究においては，現代社会における「発達」の価値観を探求するために，自然科学や社会が求めてきた合理主義的な価値とそれに対する批判的な価値観が，家族意識とどの様な関係性を有しているかに焦点を当てて発達心理学的に考察を行うものである[2)]。

目　　的

本研究では，現代社会において社会意識の中に人々の発達観がどの様に浸透しているかを分析すると共に，その発達観と人々の家族意識との関連性を探り，今後の家族関係研究におけるアプローチについての新しい視点について検討を行うことを目的とする。

方　　法

1．調査の内容

(1)　発達観尺度の構造について

現代社会の急速な変化を様々な視点から「～化」としてランダムに取り出し，それらの中から特に現代社会において社会的に「発達」として是認されていると思われる事象を選択した。更にそれらを変化の特色から，質・量・速さ，また，変化の対象として人・物に分類し，表1のような構造に基づき，発達観尺度の作成を行うことにした。

表1　発達観尺度の構造

特色／対象	質	量	速　さ
人	欧米化 国際化 レジャー化	高齢化 高所得化 人口流動化	早教育化 競争化 能率化
物	技術革新化 合理化 都市化	高層化 物資化 消費化	高速化 インスタント化 電算化

変化の特色である質・量・速さの3分類と，変化の対象となる人・物の2分類との組み合わせによって得られる6つのセルに各々3つのトピックスを配置した。

こうして得られた18項目について，現代社会の目指している合理主義的な変化（発達）を志向した特徴を表した意見をA，反対に反合理主義（自然主義）的な志向の特徴を表した意見をBとし，AとBを対にして回答者に選択させることで発達観を捉えるものとする。

AとBの選定にともない，各々の文章ができるだけ等価になるように表現に工夫を凝らした。

(2)　家族意識について

ここでは現代社会における代表的な家族意識として，次の3項目を取り上げることにした。即ち結婚後，親と同居をしたいと思うかどうか（拡大家族志向），結婚後，女性は夫の姓を用いることがよいと思うかどうか（家制度受容），そしてもう一度生まれるならば同じ親から生まれたいと思うかどうか（親への求縁）の3項目である。これによって発達観と家族意識との関連性を分析し，現代社会における家族意識を規定する価値観を考察する。

(3)　face sheetについて

性・年齢・同胞数・出生順について回答を求め，これらの観点からも資料分析を試みる。ただ今回は，回答者がすべて学生であったため，年齢による分析は行わなかった。今後，回答者の拡大と共に，地域，老人との同居などもface sheetに加える必要があると考えている。

以上の調査内容を含んだ調査用紙「社会意識調査」が，巻末の付表1である。

2．調査の対象

いずれ各年齢階層に幅広く実施し，年齢発達的に分析を試みる予定であるが，まず，発達観尺度

の吟味という意味で，今回は予備的に，茨城大学教育学部２年生241名を対象とした。その内回答の不完全な16名を除き，225名（男性79名，女性146名）から分析に耐えうる回答が得られた。

３．調査の手続き・期日

青年心理学，児童心理学の授業の中で，受講生に調査の目的を十分説明して，協力を依頼した。調査に要した時間は約15分であった。期日は，1994．１．６～13である。

結　　果

１．各項目の通過状況から

(1)　全体による特色

まずはじめに，18対の意見項目について，回答者全員（225名）による特色を，図１をもとにみていくことにする。図１とは，意見Ａ，Ｂの回答率を，帯グラフに示したものである。

項目を設定するにあたりＡ・Ｂ両項目間の魅力度が等価になるように配慮したが，今回の調査では，全体的に，Ｂ回答率がＡ回答率より高い傾向がみられた。また，１から18までは構造化した６つ（質×人，質×物，量×人，量×物，速さ×人，速さ×物）のフレーム上に，それぞれ３項目ずつ配置しているが，意見Ａ，Ｂの回答の構造による特色はみられなかった。

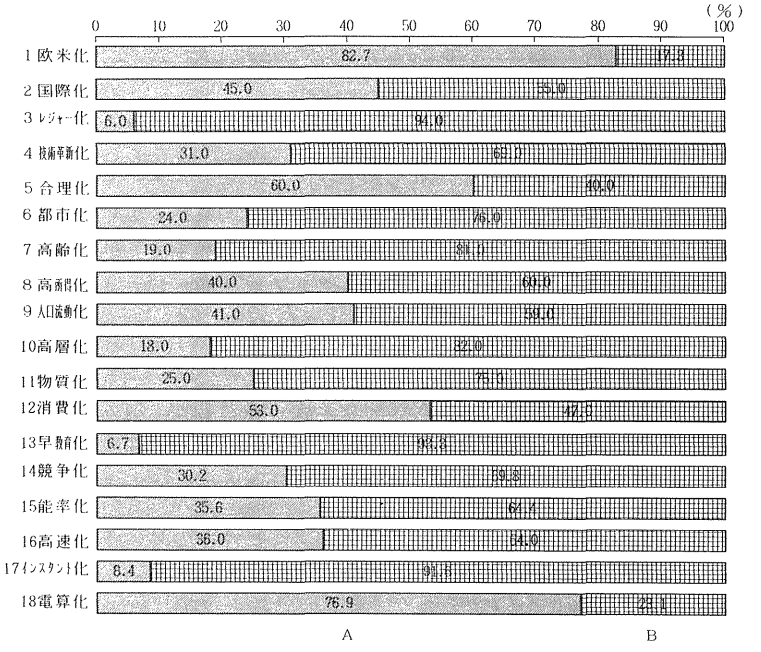

図１　意見Ａ，Ｂの回答率（全体）

次に，意見Ａの回答率の高い項目を上位からあげてみると，18電算化，１欧米化，５合理化，12消費化，２国際化という項目であった。これらの項目は，現代の社会で注目を集め，誰もがよいと認める意見についてのものである。一方，意見Ｂの回答率についてみると，３レジャー化，13早教育化，17インスタント化，10高層化，７高齢化の順であった。これらの項目も意見Ａの回答率の高い項目と同じように，現代の社会が更にその促進を歓迎し，肯定的に受け止めている内容を盛り込んだ項目であるにもかかわ

らず，A回答が低かった。即ち，このような社会の動きに対しては，批判的な見方をするものがぼつぼつ増え始めた側面と言えるのかもしれない。但し，今回の調査は，大学2年生を対象としているため，あくまで学生の意見であることに留意すべきである。

(2) 男女による特色

次に，1から18の項目について男女による回答の特色を見ていくことにする。回答者は，男性79名，女性146名であった。7，9，17の3項目を除いて,男性のほうが女性よりもA回答が多かった。このような結果から，男性は，女性よりも，現代社会が取り入れる新しい物事に対して共鳴する傾向が強いのではないかと思われる。7高齢化の項目では，回答に男女による違いはみられず，A回答をしているものは，共に，およそ19％であった。9人口流動化，17インスタント化の2項目では，女性のほうがA回答をしているものが多かった。このような結果から，女性は男性に比べ，解放的で自由な都会志向が強く，女性と料理（家事）という昔からの性役割に対して反発的な考えを持つものが増えてきているように思われる。

男女間で，回答に大きな差がみられたものは，1欧米化，5合理化，11物質化，13早教育化の4項目に於てであった。これら4項目では，どの項目においても男性のA回答が女性のA回答より多かった。13早教育化についての項目では，A回答率は，女性3％に対し，男性13％であった。これら4つの項目は，女性の批判が集中している側面についてのものと言えよう。

男女それぞれについて，まず男性ではA回答の大きい項目として，上位から，18電算化，1欧米化，5合理化，12消費化，16高速化であり，B回答の大きい項目は，3レジャー化，17インスタント化，13早教育化，7高齢化，10高層化の項目であった。また，女性でA回答の大きい項目は，上位から，18電算化，1欧米化，5合理化，12消費化，2国際化の項目で，B回答の大きいものは，13早教育化，3レジャー化，10高層化，11物質化，7高齢化の項目であった。A回答の大きい項目については，男女間に大きな差はみられなかったが，B回答の大きい項目については，上位5項目の順位が異なっていた。したがって全体による特色と比べてみると，A回答の大きい項目については，男女ともにほとんど差はみられなかったが，B回答の大きい項目については，男女ともに，順位が異なっていた。

(3) 出生順位による特色

最後に，1から18の項目について，出生順位による特色を見ていくことにする。face sheet に記載された同胞数，出生順位をもとに，「第1子」と「その他（第1子以外の者）」とし，調査対象者を2群に分けた。但し，同胞数1人の場合は第1子とした。第1子128名，その他97名であった。11物質化，14競争化，15能率化，16高速化，18電算化の5項目を除き，第1子のほうにA回答が多くみられた。14競争化，16高速化の2項目では，出生順位による回答の違いはほとんどみられなかった。11物質化，15能率化，18電算化の3項目では，わずかではあったがA回答がその他に多くみられた。

出生順位によって，回答に差がみられた項目をいくつか上げてみると，1欧米化，2国際化，5合理化，6都市化，7高齢化などの項目であり，これらの項目では，第1子にA回答が多くみられ全体による特色と比べてみても，その割合が第1子は上回り，その他は下回っていた。このような結果から，第1子は，その他よりも新しい考えをどんどん取り入れる傾向があると思われる。

次に，A回答の大きい項目についてみていくと，第1子，その他ともに，上位から18電算化，1

欧米化，５合理化，12消費化，２国際化と続いており，これは，全体による特色と全く同じ結果であった。Ｂ回答の大きい項目は，第１子は，上位から13早教育化，３レジャー化，17インスタント化，11物質化，10高層化であった。また，その他では，３レジャー化，13早教育化，17インスタント化，７高齢化，10高層化であり，Ｂ回答の大きい項目については，その他は全体による特色とほぼ同じような結果であったが，第１子では，上位２項目が異なっていた。

２．各項目間の関連性から

18対の意見項目間の相互関連性をみるために,153個のϕ係数を算出して相関行列を作成した。これらの係数の有意水準をχ^2値によって調べたところ,５％で有意な項目数は27,1％水準で15，0.1水準で10の項目であった。これらを図示した結果が図２である。これらの有意な関連性を示した52組のϕ値の値のうち,特に0.1％水準の10組について，関連の強さの順に一括した結果が表２である。

そこで，全体として他の項目と相互関連度の多い項目６，８，９，12を中心に，次いで10－17の関連項目について考察する。

表２　18項目の関連性の高い10組（$p<0.001$）

順位	関係項目	順位	関係項目
1	6－9	6	8－9
2	10－17	7	4－9
3	6－13	8	8－14
4	11－12	9	12－14
5	6－8	10	5－12

(1)　項目６を中心に

項目６－８，６－９，６－13の関係を示すと表３のようになる。これらを表２で示した関連性の高い順に述べることにする。

表３　項目６－８，９，13

6	8		9		13	
	A 所得	B 愛情	A 自由	B 親密	A 早教育	B 遊び
A 都会	34	21	46	9	10	45
B 田舎	56	114	46	124	5	165

表３で示したように，項目６の意見Ａが都会志向型であり，これを選んだ者のうち約48％が解放性，自由な人間関係を是とする項目９の意見Ａを選び，項目６の意見Ｂ田舎志向型ではその約73％が親密，かつ人情味のある人間関係を是とする項目９の意見Ｂを選んでいる。同表で項目６－８の関係を見ると，項目６の都会志向型の約62％が家族の幸せを所得の多さに求め，田舎志向型では約67％が愛情の多さに家族の幸せを求めている。項目６の田舎志向型の170名のうち項目13での意見の早教育志向が約３％に過ぎないのに対し，都市志向型ではその約18％が早教育志向である。

(2)　項目８を中心に

項目８－14の関係は，表４に示したように，項目８の家族の幸せを所得の多さに求めるＡ回答者のうち，競争原理の支持者は約

表４　項目８－14

8＼14	A 競争	B 共存
A 所得	39	51
B 愛情	29	106

43％であるのに対して，家族の幸せを愛情に求めるＢ回答者については競争原理の支持率は21％に過ぎず，家庭と社会についての考え方には一貫性がある。

(3) 項目９を中心に

表５は項目９と４の関係を示すものであるが，項目９の都会の解放的かつ自由な雰囲気を志向する者のうち，項目４の人工的な空調整備か自然の季節感かについては，その約55％が自然を支持しているに過ぎない。一方，田舎の親密かつ人情味のある雰囲気を志向する者の場合，その約78％が自然の空気を尊重する傾向がある。項目９と８の関係については，表５に示した通りであり，項目９のＡは項目８もＡを，反対に項目９のＢは項目８もＢを選ぶ傾向が認められる。

(4) 項目12を中心に

項目12と関連の高い項目５，11，14との関係を示したものが表６である。

表５　項目９－４，８

9	4		8	
	A 空調	B 自然	A 所得	B 愛情
A 自由	41	51	50	42
B 親密	29	106	40	93

項目12はＡの生産と消費促進支持群とＢの不便に耐えても環境破壊を防止すべきとする節約支持群とに分かれているがＡ群は，項目５において約70％がオートメーション化を支持しているのに対し，Ｂ群は約48％にとどまり手作りの支持率が高い。項目11の原子力エネルギー使用についての賛同傾向では，項目12のＡ群は約36％であるのに対して，Ｂ群では約13％にとどまっている。最後に，項目14の競争原理支持率は項目12のＡ群で約40％なのに対して，Ｂ群では約14％で，一貫した判断傾向が読み取れる。

表６　項目12－５，11,14

12	5		11		14	
	A オートメーション	B 手作り	A 核・賛成	B 核・反対	A 競争	B 共存
A 消費	84	36	43	77	48	72
B 節約	50	55	14	91	20	85

(5) 項目10－17について

項目10と17との関係を示すと表７のようになり，項目10の和風家屋を支持する回答が極めて多い特色があるが，和風家屋支持のＢ群において，項目17の家庭独自の味を是とする割合は約95％であり，高層建築支持群の75％よりも高率である。

表７　項目10－17

10＼17	A 規格味	B 独自味
A 高層建築	10	30
B 和風家屋	9	176

(6) 各項目間の関連性と構造

18項目相互の関係を示す153のϕ係数のうち５％以下の有意水準を示したものを図示すると図２のようになる。質×人の項目群（１，２，３）は，質×物，量×人，速さ×人との関連性が低く，わずかに量×物の項目群（10，11，12）のうちの項目11とだけ関連性を示す。質及び量の分野では，それぞれ人と物相互の関連性ははっきり分かれて，構造化した意図と一致していない。速さに関する人と物の関連性は，高速化（16－13，16－14，16－15）の項目と電算化（18－15）の項目におい

			質						量						速さ					
			人			物			人			物			人			物		
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
質	人	1		*									*							*
		2	*																	
		3											**							
	物	4					*	**		*	***	*	**		**			*		
		5				*		**				**		***	*	*	*	**		
		6				**	**			***	***	*		*	***			*	*	
量	人	7									*						**			
		8				*		***			***				*	***	*			
		9				***		***	*	***					*				*	
	物	10				*	**	*						*		**		**	***	
		11	*		**	**								***	*	**				*
		12					***	*				*	***		*	***	**	*		
速さ	人	13				**	*	***		*	*		*	*		**		**		
		14					*			***		**	**	***	**			*		
		15					*		**	*				**				**		*
	物	16				*	**	*				**		*	**	*	**			*
		17						*			*	***		*						
		18	*										*				*	*		

図２　18項目の関連性

（＊＝p＜５％，＊＊＝p＜１％，＊＊＊＝p＜0.1％）

て成立しており，回答者の社会意識のあり方，関心を読み取ることに成功した分野である。

3．家族変数との関連性から

ここでは，18項目からなる社会意識と家族変数との関連についての結果を示すことにする。家族変数は，付表1に示したように，①結婚後の親との同居を望むかという拡大家族志向，②結婚後女性が男性の姓を名のるかという家制度受容，③同じ親から生まれることを望むかという親への求縁という3つの家族意識項目によって捉える。

(1)　3つの家族意識項目の通過状況

1）全体による特色

まずはじめに①②③について全体的な傾向を百分率で図示すると，図3のようにになる。

（%）

①　拡大家族志向	はい（31.1）	いいえ（68.9）
②　家制度受容	はい（60.9）	いいえ（39.1）
③　親への求縁	はい（66.2）	いいえ（33.8）

図3　家族意識項目の回答率（全体）

図3によると，①では拡大家族志向を望むとする回答は全体の31.1％であり，同居を望まない傾向が68.9％と全体の7割に達している。また②の夫婦別姓についての家制度受容については，夫の姓に変わることへの抵抗感はあまりなく全体の60.9％が夫の姓への改姓を受容している。③では今の自分の親に対する求縁を聞いた設問であるが同じ親を選択するという意見が全体の66.2％に達している。これら全体的傾向から次のことが言えるのではないだろうか。①では同居を望まない傾向が多いにもかかわらず②では，夫婦別姓傾向が多く，現在の日本の家制度としての同姓については違和感がなくどちらかというと保守的であると言える。この2つの設問からも言えることは，比較的現在の学生は自己中心的であり，かつ保守的であるといえよう。また③では親を受容しているということは，ある意味で家族関係が比較的良い環境にあるということも言えるが，一方では，親に対する依存的な態度も推測できるのではないかと考えられる。

2）男女による特色

（%）

男　性	はい（39.2）	いいえ（60.8）
女　性	はい（26.2）	いいえ（73.8）

図4　家族意識項目①の回答率（男女別）

①の拡大家族志向に関しての性差を図4に示した。全体的傾向として男性の同居志向より女性のほうが低率であった。また，ここで女性の同居志向が低率であるということは，結婚による夫の親との同居という問題を意識するためではないかと考えられる。

（%）

男　性	はい（65.8）	いいえ（34.2）
女　性	はい（58.2）	いいえ（41.8）

図５　家族意識項目②の回答率（男女別）

②の家制度受容に関しては，図５にみられるように，同姓支持率は男性の方が，女性よりやや高い傾向が見られる。これは，最近の夫婦別姓や女性の社会的進出の影響が反映されているように感じられる。しかし全体的には，どちらかというと従来の保守的な意識の方が強いようである。

（%）

男　性	はい（60.8）	いいえ（39.2）
女　性	はい（69.9）	いいえ（30.1）

図６　家族意識項目③の回答率（男女別）

③の親への求縁に関する性差では，図６の示すように男性の60.8%，女性の69.9%が同じ親を選択しており，若干女性のほうが男性に比べ，求縁度が高い。

３）出生順位による特色

前述の如く出生順を第１子か否かに２分類して，前者を「第１子」，後者を「その他」として分析する。

（%）

第１子	はい（26.6）	いいえ（73.4）
その他	はい（37.1）	いいえ（62.9）

図７　家族意識項目①の回答率（出生順）

拡大家族志向に関しての出生順の結果は，図７のとおりである。第１子の同居肯定は，26.6%であるのに対して，その他の場合は37.1%であり，その他の群の方が多い。この理由については，今回の資料のみから読み取ることはできないが，第１子に対する，それまでの親側の同居期待が意識的に負担を感じさせているかもしれない。

（%）

第１子	はい（57.8）	いいえ（42.2）
その他	はい（64.9）	いいえ（35.1）

図８　家族意識項目②の回答率（出生順）

図８によると，第１子の57.8%が，夫との同姓を可としているのに対して，その他では64.9%とやや多い割合を示しているが，この理由についても手がかりになる資料は現段階では存在しない。

（%）

第１子	はい（63.3）	いいえ（36.7）
その他	はい（71.1）	いいえ（28.9）

図９　家族意識項目③の回答率（出生順）

図９が示すように，同じ親から生まれたいと回答した割合は，その他では71.1％と高い率で，現在の自分の親を好意的に認知していることがうかがえる。しかし見方によっては親に対して依存的な傾向があるということなのかもしれない。

(2) 主な発達観尺度項目と家族意識項目との連関

発達観尺度18項目の中で３つの家族意識項目との何らかの関係性が予想されうる３，７，８，９，14，17，の６項目との関係を調べるため，ϕ係数を求め，χ^2検定による有意性の検定を試みた。その結果，いずれも５％水準で①－９，③－７，③－９の組み合わせにおいて有意差が認められた。

①拡大家族志向と項目９との関係を示すと表８のようになる。これによると，親との同居を否定して核家族を志向するＮ群では，約54％が，人間関係について親密さを求めているのに対して，親との同居を肯定して拡大家族を志向するＹ群では，約70％が親密さを求めていることが分かる。人間関係のあり方に対する意識と親との同居志向との間にこのような関係性が存在することは，興味深い。

表８　拡大家族志向①と項目９

①＼9	A 自由	B 親密
Y 拡大家族	21	49
N 核家族	71	84

③親への求縁と項目７との関係を示すと表９のようになる。これによると親との求縁を求めるものは，約24％が長寿肯定であるのに対し，離縁群では約９％しか長寿を肯定していない。親への求縁と長寿肯定が家族的つながりを感じさせる結果として興味深い。視点を変えて長寿肯定群では，約83％が救縁であるのに対して，長寿否定群では，約63％にとどまっている。

表９　親への求縁③と項目７

③＼7	A 長肯	B 長否
Y 求縁	35	114
N 離縁	7	68

③親への求縁と項目９との関係を示すと表10のようになる。これによると求縁群は，人間関係の上でも親密さを求める傾向にあるということが言える。親と子の関係が社会的人間関係にも影響を与えることが考えられる。一方，離縁群では，自由群と親密群が50％程度で答えが２分されたのは印象的である。

表10　親への求縁③と項目９

③＼9	A 自由	B 親密
Y 求縁	53	96
N 離縁	39	37

ここでは，家族意識項目の１～18の全項目についてのクロス集計は行われていないので，他の項目のクロス集計も行ってみる必要もあろう。

考　　察

1．発達観尺度項目の構造と通過状況

A・B回答率を構造上から見ていくと，A回答率34.7％，B回答率65.3％であり，その割合はおよそ1：2であった。このような結果から，現代社会における変化を是としないものが多いと言える。

次に，構造上における変化の質・量・速さでは，B回答率は，速さ（67.7％），量（67.3％），質（61.6％）であった。対象の人と物では，B回答率は，人（67.6％），物（63.0％）の順であった。しかし，変化×対象でB回答率の高い順を見てみると，最も高いのは，速さ×人（75.9％），最も低いのは，速さ×物（59.6％）であり変化と対象における順位とは一致しなかったことから，意見の構造によって，回答に特色がみられたのではなく，むしろ，対にした意見の内容によって，このような結果が得られたものと思われる。つまり，回答者の立場からすれば，意見Aと意見Bに対する魅力度のウェイトが異なっていたということも考えられる。しかし，A回答の多い項目つまり，18電算化，1欧米化，5合理化，12消費化，2国際化と，B回答の多い項目，3レジャー化，13早教育化，17インスタント化，10高層化，7高齢化とを比較することによって，現代社会が求めている発達という価値にも，人気の度合いが異なり，ますます歓迎され追求されようとする未来の価値と，批判されはじめている過去の価値とに分かれつつある。

2．各項目間の関連性と構造

図2で示したように，質×人の項目群（欧米化，国際化，レジャー化）は他の項目群との関連性が極めて低く，わずかに量×物の項目群のうちの項目11の物質化とだけ関連性を示した。これは，トピック選定の誤りによるものか，A・B両意見の文章の魅力度に差があったためか，理由は明確ではない。今後検討の必要があるだろう。質及び量の分野では，それぞれ人と物相互の関連性ははっきりと分かれており，構造化した意図と一致していないが，これは，人に対する意識と物に関する意識のずれが顕著に現れた結果ではないかと思われる。社会の発達や変化への認識は，まず物的なことから始まり，人間関係に対する変化は流動性よりも安定性を求めるのであろう。更に，速さに関する人と物との関連性は，項目16の高速化と，早教育化・競争化・能率化及び電算化の項目で成立しており，現代の日本社会の人と物の関係に対する意識のあり方，関心の深さを浮き彫りにし構造化した意図の成功した分野である。

全体として，現代社会の表層の文化や技術などの物質面，情報面では受容も変容も早いが，実生活上の意識や行動面では，意外と堅実で慎重な若者像ということがこの調査で得た成果である。構造的に意図の達成できなかった分野を再検討し再調査をすれば，もっと興味深い結果が得られるのではないかと思う。

3．家族変数と構造

ここでは，家族意識項目と発達観尺度項目とのクロス集計において，①－9，③－7，③－9について有意差が認められた。特に発達観尺度項目の7，9は，量と人に関連する質問であり，①－9では，拡大家族志向群は，自由よりも親密を求める傾向が高い。また③－7では，親への求縁群

は，長寿肯定の傾向が見られ，さらに③－９では，親への求縁度が高いものほど，社会的親密性を求める傾向が高い。逆に親への求縁度が低いものほど都会的自由性を求める傾向にあることが読み取れる。つまり拡大家族志向や親への求縁度は，現代の若者の社会的価値観と強く関係しているということが言えるのではないだろうか。

次に家族変数とは別に発達観尺度項目８と他の発達観尺度の関連性を見ると，この項目が高所得価値観を示す設問になっているので，表11に示すように，他項目との間に多くの有意な関係性が認められる。たとえば項目８で愛情と項目６の田舎志向，項目９の親密，項目14の共存において，それぞれ構造をまたいで一貫した意見の反映が読み取れた。

表11　発達観尺度項目８と有意差のある項目

8	4		6		9		13		14		15	
	A 空調	B 自然	A 都会	B 田舎	A 自由	B 親密	A 早教	B 遊び	A 競争	B 共存	A 能率	B ゆとり
A 所得	35	55	34	56	50	40	10	80	39	51	41	49
B 愛情	35	100	21	114	42	93	5	130	29	106	39	96
	*		***		***		*		***		*	

結　　論

現代社会においてみられる変化は，発達という概念で置き換えてもよいほど現代の人々が求めている変化である。本研究において，構造化に基づいて18の変化を取り上げ，その各々に内容的には反対の意味を持つ意見Ｂを対置させて，18対の意見項目を準備し，大学生を対象にして，ＡとＢいずれの意見に賛同するかについて調査したところ，１：２の割合でＡよりＢの意見が支持された。

しかし，電算化，欧米化，合理化，消費化などの項目については，意見Ａの支持率が高く，現代社会が，なお，その方向に向かって進みつつある発達の側面である。これに対して，レジャー化，早教育化，インスタント化などの項目については，意見Ｂの支持率が高く，現代社会の変化の中でも，反省や批判が高まりつつある発達の側面であるといえよう。

性別について見られる特色は，意見Ａの支持率が，男性の方が女性より高いという特色が見出され，女性より男性が合理主義的傾向が強いようである。

18項目間の関連づけからは，例えば項目12の消費を支持する回答者は，項目５のオートメーションを支持するというように，一貫した意見の反映が認められ，さらに家庭生活面での変化に対する意見は，社会生活面での変化に対する意見と矛盾なく一貫した反応が見出された。

家族意識を捉える３つの項目からは，回答者の自己中心的な意識と同時に，保守的，依存的な意識の強さが読み取れた。

注

1）麦島文夫　1985　「21世紀の発達心理学を展望する」『教育心理学年報』第25集，pp.20－24.

2）本研究は，茨城大学教育学研究科における「発達心理学特論」及び「親子関係論演習」の授業において討論した内容を発展させ，家族意識の発達を中心とする社会意識との関係から分析するための尺度の開発を試みたものであり，当授業への参加者によって行われたものである。

付表1　社会意識調査

下に18対の意見項目が並んでいます。各対のAとBのうち，あなたの考えに近い方の意見に○をつけて下さい。

男　　女	満　　歳	きょうだい数(自分を含め)　　人	第　　子

1
- A　日本人がロックのような外国のリズムに関心を広げることは良いことだ。
- B　日本の伝統的な音楽に対し，学校でもっと関心を持つことは良いことだ。

2
- A　日本人はますます英語に熟達する必要があるので，小学校から英語の授業を始める方がよい。
- B　日本人は誇るべき文化を外国に広めるために，もっと小学校で国語や伝統文化の授業に力を入れる方がよい。

3
- A　真の人生の幸福を得るには，今の生活を犠牲にしても将来のために仕事中心でやる方がよい。
- B　真の人生の幸福は，今の生活をこそ大切にすべきであるので，仕事は二の次に考える方がよい。

4
- A　たとえ季節感が薄れても，技術革新によって快適な空調の完備した生活の方がよい。
- B　たとえ温度や湿度の不快感があっても，自然の季節感のある生活の方がよい。

5
- A　安く良いものを効率よく生産するためにオートメーション化は推進すべきだ。
- B　量産できずコストが高くても手づくりへのこだわりこそ大切にすべきだ。

6
- A　生活するには，便利であり，何事にも洗練され，娯楽設備も豊かな都会がよい。
- B　生活するには，空気が澄み，健康で，のんびり暮らせる田舎がよい。

7
- A　たとえ厄介者と言われても人には生きる権利があるのだから，できるだけ長生きした方がよい。
- B　人生は充実した瞬間の蓄積こそ意義があるのだから，長生きにこだわることはナンセンスである。

8
- A　家族の幸せは，何と言っても所得が多いことが前提条件である。
- B　たとえどんなに貧乏でも，愛があれば家族の幸せを得ることができる。

9
- A　人間関係は薄いが，人口移動の多い都会の方が解放的かつ自由で住みやすい。
- B　不便であっても，田舎の方が近所付き合いが親密かつ人情味があり住みやすい。

10
- A　土地の有効利用のためには，多少のリスクはあっても高層建築こそ今後ますます建築すべきである。
- B　自然に恵まれ，災害時の被害が少ない従来の日本家屋こそ，もっと見直すべきである。

11
- A　厳しい安全管理下で操業する原子力エネルギーによる生産は，資源の乏しい日本にとって，今後ますます推進されるべきである。
- B　たとえ生産性が低下したとしても，核廃棄物処理や放射能汚染問題とは無縁のエネルギーによる生産に歩調を合わすべきである。

12
- A　世界の国々が豊かになるために，貿易を活性化し，生産と消費を促進することが必要である。
- B　資源の損失や，環境破壊を防止するためには，生活の不便に耐えることこそ必要である。

13
- A　将来有利な生活の保障のために，早期才能開発はますます推進すべきである。
- B　幼児期は，幅広い人間形成の基礎をつくる時期だから，遊びを中心とする生活を送らせるべきである。

14
- A　人間社会のますますの発達のためには，競争意識は不可欠である。
- B　人類の真の幸福のためには，お互いの調和的共存こそ不可欠である。

15
- A　真のゆとりや自由をより多く獲得するためには，仕事の能率化をさらに促進すべきである。
- B　真の精神的ゆとりを得たいと願うならば，おもいきって能率化だけを目指す生き方をやめるべきである。

16
- A　快適感を味わったり時間節約のためには，さらに乗り物の高速化が必要である。
- B　安全性や公害問題を考えると，これ以上の乗り物の高速化は不必要である。

17
- A　味が吟味され，簡単に調理できるインスタント食品の開発・生産をさらに推進すべきである。
- B　失敗もあり面倒でもあるが，家庭や郷土の独自の味わいのある手づくりの料理を毎日食すべきである。

18
- A　コンピュータは個人の日常生活の能率上，極めて便利な存在である。
- B　コンピュータは個人の情報管理や情報漏洩上，極めて危険な存在である。

次の３つの設問に対して　はい　いいえ　のいずれかに○を付けて下さい。

① あなたは結婚後，親との同居生活をしたいと思いますか。　はい　いいえ
② 結婚後，女性は夫の姓を用いることがよいと思いますか。　はい　いいえ
③ もう一度人生があるなら，また同じ親から生まれたいと思いますか。　はい　いいえ